

うしお

第108号

昭和40年5月

目次

一般漁況(3・4月分)	漁業部	1
4月のマグロ延縄漁況	〃	3
漁場観測速報(4月分)	養殖部	4
定置観測(4月分)	〃	6
鹿児島県で漁獲されるトラフ グの寄生虫について	調査部 荒牧孝行	8
漁村のことわざ	北山易美	12
奄美短信	大島分場	14
養魚場の動き	大口養魚場	15
各部の動き	編集部	17
分場の動き	大島分場	18

鹿児島市城南町20番12号

鹿児島県水産試験場

一 般 漁 況 (3 , 4 月 分)

漁 業 部

(3 月 分)

○ 海 況

全般的に表面水温の低下が著しく、上昇した海域は宇治、草垣で2~3℃であつたのが目立つた。このように黒潮流域に比較的接近した海域での水温低下が目立つており、屋久島海域を含む薩南東部海域では、前月に引きつゞき平年より低目がつゞいている。

○ 旋 網

種子島近海は依然として好漁が続いている。南部では大サバ47%、中小サバ36%、中アジ16%、北東部はウルメが主体。中旬に入つてやゝ低下し、漁場は東部の100尋線と馬毛島北部になつた。馬毛島ではムロが主体、東部ではウルメ。又、串木野根抛の船はこしき島近海へ移動、小サバ40%、中アジ33%で下旬になつて上こしき島西側で小アジ100%となつた。阿久根沖から長島では小アジ50%、カタクチ50%。なお、種子島東方の100尋線では赤ムロ80%、小アジ20%。馬毛島周辺は下旬になつて小ムロ80%、小アジ20%となつた。

○ 近海カツオ

小型船は宮古、大東島、鳥島方面まで南下し、1隻2~4トン。昨年は臥蛇近海まで北上していたが今年の七島近海は水温の上昇がおそく、昨年より2~3℃も低い。このため大部分の船は喜界島NE~E10~20湊でピンナガ釣に出漁しており平均5~7トンの漁。下旬になつてオガン曾根に群が見えていたが水温が低いのと水色が悪いため餌付が悪いようで香しくなかつた。

○ ヨコワ曳縄

22日から枕崎沖で本格的な操業に入つた。

漁場は枕崎と黒島の間で200余隻出漁している。魚体は2~2.5kg。

○ 東海サバはね釣

3月中旬に銚子沖のサバ漁を終え魚釣島W20湊に移動し1隻で35~40トンの好漁をなし久々に再開された。魚体は中小サバ95%。

○ 近海マグロ延縄

3月下旬になつて種子島SE20湊でキハダの好漁があり今後つゞく模様である。今のところキハダを20~30尾(1航海、4~5日操業)の漁。

(4月分)

○ 海 況

4月に入り水温が急激に上昇するのは例年の傾向であるが、薩南海域では3月までは例年より2~3℃低目であつたのが、4月中旬に入つて平年値との距りは小さくなり1℃内外の低目となつた。こしき島近海~草垣島近海の中旬では高めになり、大隅海峡での中旬は、上旬より2~3℃の高目となつた。

○ 旋 網

種子島東方の100尋線ではアカムロ70%、小アジ20%、馬毛島近海ではムロアジ50%、小アジ20%、ウルメ10%で4月中好漁がつゞいた。阿久根近海では中、小アジ90%、ウルメ、カタクチの混獲が10%程度。中旬になつて牛深西部の100尋線では小アジ75%、カタクチ20%、マイワシ3%(体長1.5~1.8cm、体重4.5~7.5g)、阿久根寄りにはカタクチ70~100%、下旬には片浦~阿久根近海では小サバがみえ始めた。牛深沖でのマイワシは下旬になつて漁はなく志布志湾で若干(0.8トン)漁獲された。

○ 近海カツオ

漁場は臥蛇島から屋久島南に北上した。魚体は小判が大部分。草垣島近海は依然として低水温のため漁はなく、この方面での漁期は昨年と比べ1ヶ月程遅れているが、一般に今年の漁場は東に偏り七島寄りに形成されている。

○ ヨコワ曳縄

3月末より始まつたヨコワ漁は4月に入つて本格的な操業となり、漁場は枕崎近海から硫黄島~湯瀬、馬毛島、都井岬及び種子島と広がつた。魚体は2kg前後で3月と交りない。中旬になつて一時不漁となつたが、下旬に若干増加した。又鹿兒島湾口の長崎鼻附近でも漁があり、黒潮の急激な接岸のため冷水域が岸寄りに圧迫されたためであろう。

○ そ の 他

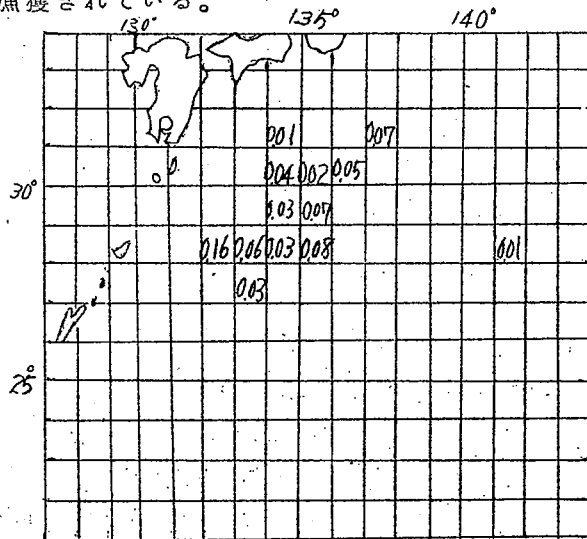
鹿兒島湾口の八田網は下旬になつて豆アジが獲れはじめたが、昨年より1ヶ月位おくられている。
湾口の川尻の定置網では小アジが主体で、5%位小サバが混つている。
種子島東方の近海マグロは3月より若干悪くなり1隻平均キハダ10~20尾となつた。

4月のマグロ延縄漁況

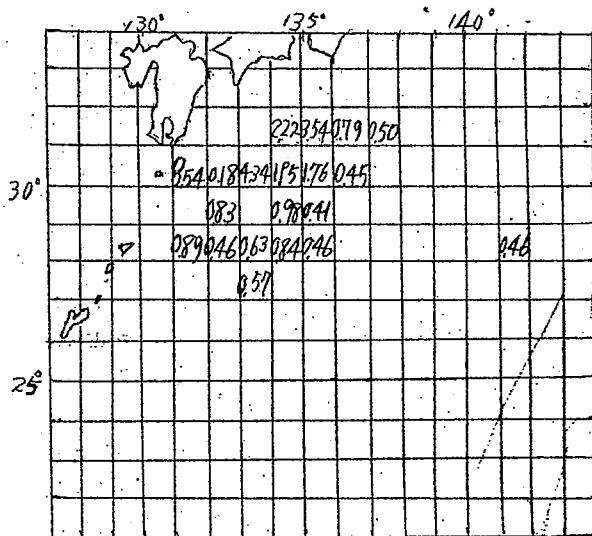
漁業部

ビンナガ漁も終漁に近く、漁場全体の釣獲率は3月の2.51から1.41と低下している。しかし30°~31°N、133°~134°E附近では釣獲率4.34という値も見られている。組成はビンナガが9.1%を占めており(39年4月はビンナガ30%、キハダ32%)、キハダの漁獲が39年に比べて少なくなっている。

クロマグロは昨年に比べやや不振のようで30°N、135°E附近を中心とした海域でポツポツ漁獲されている。



クロマグロ 釣獲率 (40年4月)



ビンナガ 釣獲率 (40年4月)

漁場観測速報（4月分）

養殖部

I 旬別平均水温

旬 別	里		水成川		福山	
	最高	最低	最高	最低	最高	最低
上旬	14.65	14.40	17.6	17.1	16.70	15.75
中旬	—	—	18.4	18.3	16.74	15.77
下旬	19.8	18.90	19.7	19.2	19.20	17.40
月平均	17.23	16.65	18.57	18.20	17.54	16.31
前月差	+0.30	+0.26	+1.98	+2.09	—	—
前年差	-1.97	-1.15	-0.83	-0.30	—	—

- 里村の4月平均水温は17.23～16.65℃を示し、前月と比較して0.30～0.26℃高く、前年同期と比較すると最高は19.20℃で1.97℃、最低では17.80℃で1.15℃何れも低くなっている。
- 水成川の4月平均水温は18.57～18.20℃を示し、前月と比較して1.98～2.09℃高く、前年同期と比較すると最高は19.40℃で0.83℃最低では18.50℃で0.30℃何れも低くなっている。
- 鹿児島湾奥部の福山の4月平均水温は17.54～16.31℃を示している尚、鹿児島新港定置観測の4月平均水温は17.05℃で福山ではこれよりも1.87℃低くなっている。
- 長崎海洋气象台5月上旬報によると、東シナ海と黄海は平年より低目の水温が続いており中でも南西諸島附近の沿岸水温が低く、又九州沿岸も平年よりやや低目になっています。今後当分の間は海面水温は低く、一時回復しても中層より深い所はまだ低目が続く見込みで注意が肝要と言うことです。

II 漁況

／ 里村

総漁獲量は14,665kgで前月と比較して3,905kgの減獲であつた。魚種別では瀬魚が9,160kgで52.46%と大半を占め、次にキビナゴが1,960kgで13.37%、ブリが1,500kgで10.23%、イセエビが1,440kgで9.81%、水イカが290kgで1.97%、メジナが185kgで1.26%、イサキが90kgで0.61%の漁獲率を示している。これを前月と比較して変動の大きい魚種はブリで1,360kgの増獲を示した反面、瀬魚で4,125kg、キビナゴで2,300kgの減獲を示したのが目立つ。又前年同期と比較して総漁獲量9,783kgで4,812kgの増獲となつており、魚種別で

はキビナゴで1,700 kg、瀬魚で1,600 kg、ブリで600 kg増獲されているのが目立つ。

月 旬	上			中			下			漁獲 量計			
	有日	漁数	延出漁船数	漁獲量	有日	漁数	延出漁船数	漁獲量	有日		漁数	延出漁船数	漁獲量
水イカ	2		2	50	4		4	165	2		2	75	290
イセエビ	7		154	630	6		60	250	7		140	560	1,440
瀬魚	7		154	3,840	7		60	1,470	8		145	3,850	9,160
ブリ	3		6	320	5		30	1,070	3		5	110	1,500
キビナゴ	3		12	940	1		3	800	1		5	220	1,960
メジナ	1		1	185	—		—	—	—		—	—	185
イサキ	—		—	—	1		2	90	—		—	—	90
タイ(他)	1		1	40	—		—	—	—		—	—	40
計	24		330	6,005	24		159	3,845	21		297	4,815	14,665

2 水 成 川

総漁獲量は2,902 kgで前月と比較して870 kgの増獲であつた。魚種別ではシビが1,519 kgで52.34%と約半数を示し、次にイセエビが759 kgで26.15%、瀬魚が371 kgで12.78%、コダイが144 kgで4.96%、アマダイが75 kgで2.58%、水イカが1.19%の漁獲率を示した。これを前月と比較して変動の大きいものはイセエビで470 kg、シビで142 kg、瀬魚で124 kg、コダイで88 kgの増獲を示し、前月中旬より甲イカが全く姿を消しているのが目立つ。又前年同期と比較して519 kgの増獲であり、魚種別ではシビが1,519 kg、瀬魚が249 kg、イセエビが245 kgの増獲であるが、前

月 旬	上			中			下			漁獲 量計			
	有日	漁数	延出漁船数	漁獲量	有日	漁数	延出漁船数	漁獲量	有日		漁数	延出漁船数	漁獲量
シビ	10		65	979	1		6	180	7		32	360	1,519
イセエビ	8		29	406	6		20	186	10		37	167	759
水イカ	2		4	15	1		2	10	2		4	9	34
瀬魚	3		13	104	5		11	95	7		27	172	371
アマダイ	—		—	—	3		14	75	—		—	—	75
コダイ	—		—	—	3		14	90	3		11	54	144
計	23		101	1,504	18		67	636	29		101	762	2,902

年同期のカツオ 1,152 kg が全く姿を消し、次にコダイが 349 kg と減獲にな
っているのが目立つ。

3 福 山

4 月、漁獲水揚げなし。

定 置 観 測 (4 月 分)

養 殖 部

○ 旬別平均水温・比重（満潮時）

旬	水 温 ℃				比 重 ρ_{15}			
	本 年	前 旬 差	前年同期差	平 年 差	本 年	前 旬 差	前年同期差	平 年 差
上	15.07	- 0.18	- 2.04	- 1.03	27.34	+ 0.30	- 0.09	+ 1.74
中	16.12	+ 1.05	- 2.73	- 0.93	25.27	- 2.07	- 1.92	- 0.43
下	17.54	+ 1.42	- 4.00	- 0.56	26.22	+ 0.95	- 0.32	+ 0.99
月平均	16.15	+ 1.00	- 2.88	- 0.90	26.54	- 0.64	- 0.55	+ 1.02

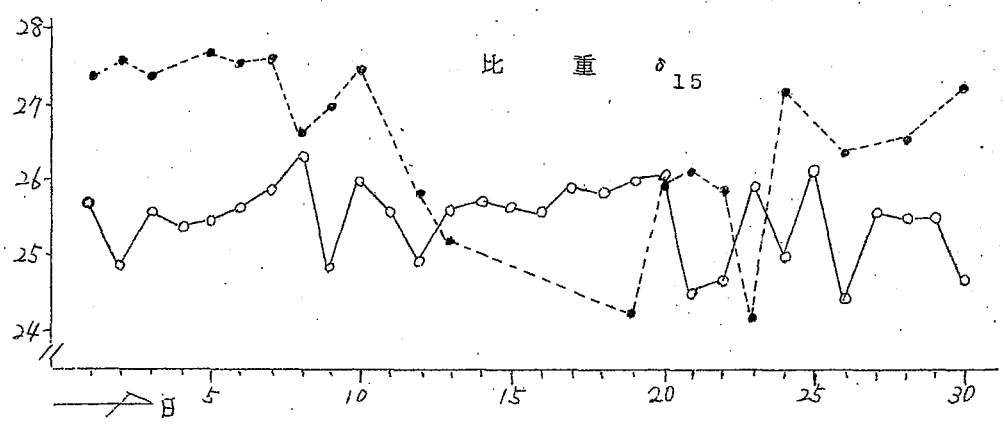
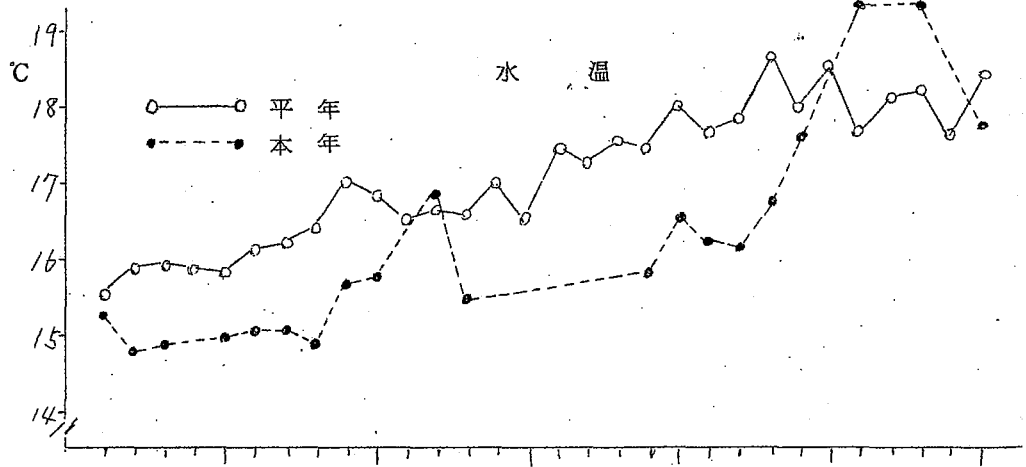
○ 水 温

14.7~19.3℃と大巾に変動した。前月中旬以降昇温の傾向をみせた水温も本月上旬に入つて再び下降し、旬平均水温として今冬の最低値を示した。下旬に入つて平年より高温の日が現われたが、月全般は平年より低目を示し月平均水温で平年より0.9℃低温を示した。特に前年4月とは対照的で、その差は本年が2.8℃も低くなつた。

○ 比 重

24.1~27.7と大巾に変動した。特に中旬の降雨で比重の低下がみられたが、上旬、中旬が高目を示し、月平均値では平年より1.0高かんとなつている。

4月の水温・比重



鹿児島県で漁獲されるトラフグの寄生虫について

調査部 荒牧孝行

本県のトラフグの主な棲息地は県北、長島と天草の間にある長島海峡、八幡瀬戸海域であり、3月中旬から5月中旬にかけて産卵回遊として来遊する。3月末から4月上旬にかけての初期のものは大型魚群で平均1尾当り3～3.5kgのものが多く、後期になると中型魚で2kg前後であるがいずれも熟卵を持った親魚である。

近年トラフグの蓄養種苗として多数の漁船が出漁するようになったが、本県でも長島町茅屋において、沿岸漁業構造改善事業の一環として39年度蓄養場を設置し今年度から蓄養事業を開始し、現在約4,000尾のトラフグを蓄養している。

トラフグ蓄養事業は寄生虫による被害が極めて多く、各地の蓄養において多数の斃死魚を出しているようである。岡本⁽¹⁾によれば寄生虫の寄生による影響を次のように述べている。

おびただしい数量の寄生虫によつてその組織が侵され、甚しい貧血を招来する場合が多く、この事は直接食欲の低下、機能の麻痺状態をおこし、亦寄生虫がエラか口腔内、内臓等に着生、生活するために起る機械的な障害、あるいは寄生による魚体力消耗とそれに附随して起る混合感染か合併症で、その種類や着生位置によつては直接死因と結びついている事も少なくない。

そこで、本県（長島地先）で漁獲されるトラフグの寄生虫について3月26日～29日、4月12日～14日の2回にわたり種苗用として漁獲されたトラフグの寄生虫（細菌性以外のもの——細菌性による調査は現在担当者が試験中であり後日報告予定）について調査を行なつたのでその種類について報告する。

※ 寄生虫の種類

第1表に示すように、天然に棲息するトラフグに今回は少なくとも7種類、すなわち、体表に2、鰓口腔に3、肝臓に2種類が寄生していた。

第1表 トラフグの寄生虫

寄生個所	動物名	種類
体 表	節足動物	ウミチヨウ
	〃	ペネラ
鰓・口腔	扁形動物	ダイクリドフオーラ
	節足動物	フグエラジラミ
	〃	グナチア
肝 臓	円形動物	スピルロイデア
	〃	頭虫類?

(1) ウミチヨウ

体長に12~15mm 淡青色を呈し、主に胸ビレ下に寄生。今回の調査ではトラフグに寄生している場合は必ず2個体以上が普通であり、1個体見い出せば表皮のどこかにまだ他のウミチヨウがいると思つていくぐらいあつた。トラフグにはこの寄生虫はしばしば見られた。

(2) フゲラジラミ

この寄生虫は口腔内或いはエラの一部にむらがつて寄生がみられ、外観は黄色の小粒を呈しているようにみられるが、この黄色の部分には1対の卵嚢でありトラフグのほとんどもに寄生がみられた。1尾当り25~40個であつたがそのほとんどが♀で占められていた。

(3) グナチア (*Gnathia* sp.)

グナチアは3月28日に漁獲されたトラフグに1個体の寄生虫をみた。

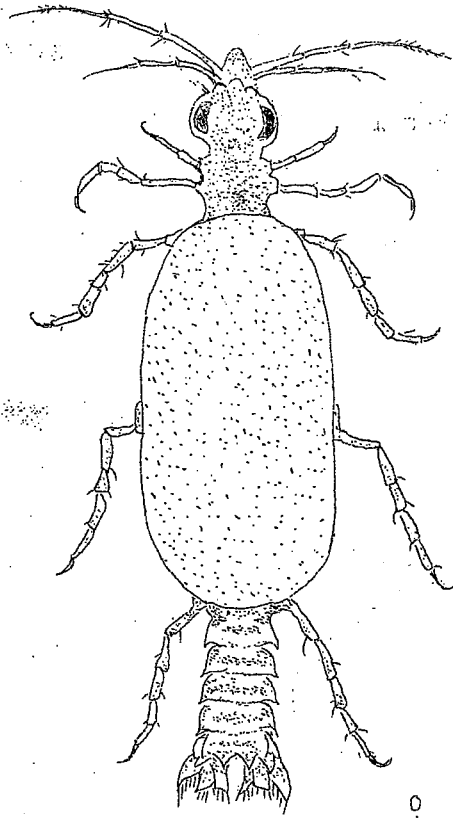


図1 図 グナチア (幼生)

この寄生虫は自由、寄生両生活の交代に伴う変態が行なわれるようで、この寄生時期は pranzia 幼生と思われる。

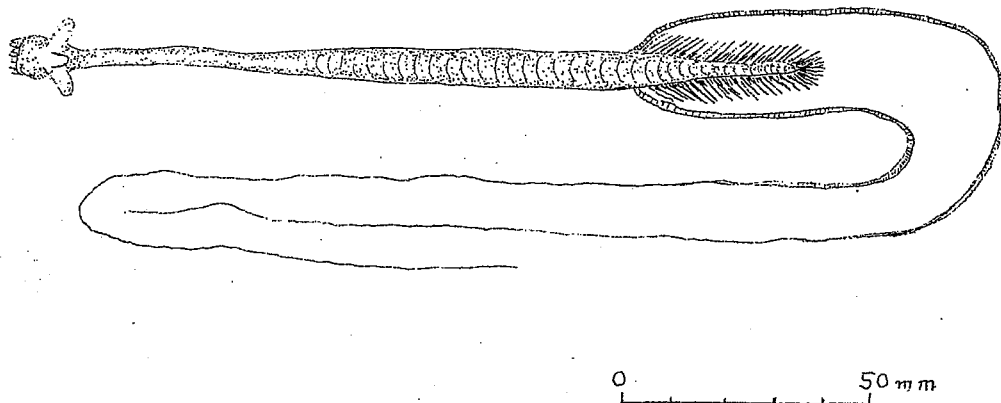
このグナチアについて特記すべきことは、39年度本県のハマチ蓄養のものにグナチアが寄生し、多数の斃死魚の続出したことである。(このグナチアの寄生及び被害報告はどこからもされていない)

すなわち、39年10月下旬から鹿児島市東桜島のハマチ蓄養場においてハマチ(700~800g)に出現、この寄生を受けたものは狂奔行動をおこし次第に衰弱し、行動緩慢となるがこのころになると吻及びその下部、腹部等はスリキズを生じ2~3日で斃死に至る。この寄生虫はハマチ1尾に対して主に鼻孔内に10~20個体、その他エラ蓋部に5~8個体、体表特にひれの下に2~3個体の寄生状況であり、この寄生虫はすべて吸血しておりグナチアの胸部後部が著しく赤色を呈しふくらんでいる。

この被害は主として11月下旬頃まで続き、多いときに1日50尾程度のハマチの斃死を出し、12月下旬になると寄生虫も次第に姿を消している。

(4) ペネラ (*Penella* sp.)

このペネラ類は藤田⁽²⁾によりマンボウ、メカジキの皮膚に寄生すると報告されている。



※2図 ペネラ

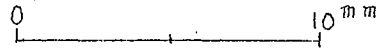
トラフグに寄生していたものは僅か1個体にすぎなかつたがしりびれの上方に寄生し、頭部はトラフグの筋肉内に50mmほど潜伏している。体は細長く、体の後方は左右に羽毛状の附属物が密生し、又細長の卵紐をもっている。

(5) デイクリドフォーラ

この寄生は口こう内、主にエラに寄生し、一見ハマチに寄生するアキシネに似ているが吸着部が著しく発達しており、エラ奥肉質部に着生した感がある。今回の調査ではトラフグ10尾に対し1尾の割合で寄生がみられ、寄生個体数も13~20であつた。各地におけるトラフグの寄生虫による被害ではこのデイクリドフォーラによる斃死が主も多く、しかも種苗時にもちこみ、生簀内で異状繁殖となり被害を与えているようである。

(6) スピルロイディア

このスピルロイディアはトラフグの肝臓に寄生するもので、肝臓内のいたるところに円形状をなして寄生している。

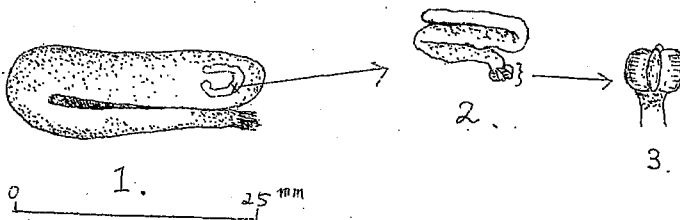


※3図 スピルロイディア

この寄生虫が多数寄生した場合、肝臓は蜂の巣状にせん孔され、肝臓の色も変色してくる。今日の調査では、1尾のトラフグから17個体のスピルロイディアを採集した。

(7) 鉤頭虫類?

この寄生虫はおそらく鉤頭虫類に属するものと思われるが、上記(6)と同じく



※4図 鉤頭虫? 1

1. 全形
2. 1図の※4膜の中にあるもの
3. その頭部と思われるもの

肝臓に寄生するもので、主として肝被膜と肝臓の中間二つに折れ曲つた状態で寄生。今回は1尾のトラフグから8個体の寄生虫を採集。

- 要旨
- 本県長島地先にて採捕されるトラフグの寄生虫について3月26日～29日、4月12日～14日の2回にわたり調査を行なつた。
 - 寄生虫は細菌性のものを除き、少なくとも7種類が寄生していた。
 - 節足動物、甲殻類、グナチアのpraniza 幼生と思われるものは本県ハマチに多数寄生し、又、トラフグにも寄生する。
 - トラフグの寄生虫は上記7種類の他体表には環形動物のヒル、節足動物のブシウドカリグス、エラ、口腔内には節足動物のカリグス、ウデウムン、フグナガクビムシ、胃腸内には扁形動物のパリンゴラ等が寄生するとされている。
 - トラフグ寄生虫駆除対策として放養時には寄生虫にネグホン 10mg/kg 、細菌性のものにオーレオマイシン 5mg/kg を蒸溜水に溶し、胸びれ下に皮下注射を行ない、蕃養管理時にはネグホンを 10mg/kg 、オーレオマイシン 15mg/kg の割合で餌に混入して週2回経口投与を行なつている。

参 考 文 献

- (1) 岡 本 亮 昭和39年
トラフグの寄生虫病 養殖第1巻第5号 p 22～25
- (2) 藤 田 経 信 昭和12年
魚病学 p 48～49
- (3) 椎 野 季 雄 昭和39年
動物系統分類学 7(上) 節足動物 p 204～210

漁 村 の こ と わ ざ

北 山 易 美

ことわざは辞書によると俚諺、昔から伝えられた金言警句、或いはいゝならしの言葉、通俗の戒め言葉と説明してある。郷土誌「さんぎし」68号にことばの文化史(芳尾時二)と題して諺は古代の帝王や聖賢が人民に下した教訓すなわち金言、格言ではない。また事業を果した英雄の持つていた座右の銘などでもないそれは古代の人民が素朴な生活の体験の中から得た尊い知恵であつて多くの生活

の指針であつたから古代社会の言い習わしとなつた。その言い習わしが親から子に、子から孫に代々語り継ぎ、言いついで誰でも知つて行かう諺になつたと記している。

即ち諺のすべてはわれわれの祖父母、曾祖父母、或いはさらにその前々の先代の人たちがそれぞれの世代の素朴な生活の中において経てきた体験の累積から編み出された言葉である。中にはたわいないものも或いは戒句でない俗言というものもあるがそれらの殆んどは子孫や後世に伝える人生街道の道しるべである。

諺はすべて片言隻句そのものズバリの警句或いは戒めの言葉であるが今のような指導機関も或いは計画性もなかつた往年の農漁民の日常のすべてはこのような先人たちの経験から割出された言葉が信頼され、またそれに支配されていたことであろう。

鹿児島県は本邦の最南端にあつて台風の常襲地帯である。そして台風銀座とまでいわれている。加えて地質は大古からの火山の影響で農耕に不適なボラ、コラシラス層である。

さつま見聞話（明治31年7月刊行 本富安四郎著）に

大雨の節は山崩れがけ落つる少なからず、新に修めたる道路も土砂に押し流されて損するところ甚だ多し 云々

さらに台風の被害状況を

風後の有様あたかも戦争にでもありたらん跡の如く、田畑の作物花飛び穂ちぎれて四方に伏し倒れたる。裂け破れたる枝葉、打ち砕けたる瓦、果物の相交りて間隙なく地上に落ち敷きたる塵芥の小溝を填めたる、倒れ木の道路を塞ぎたる、家馬小屋の或いは横さまに足投げ出して斃れたる 云々

と記しているが農家はこのような火山灰に覆れたやせ地に精こん傾け漁村の人は外海の荒波にほんろうされながら来る年々の台風にいためつけられてきたのである。

また鹿児島県は古来尚武の地で封建性の強いところで男尊女卑のしきたりがきびしかつた。今はそうでもないけれども昭和の初年度までは衣食住のあらゆる面に男性が優先して男は女の後風呂に入るものでないとか女盥に男盥、物干さおの男女用の区別、或いは男はさおの下をくぐるな、女は男より上に座るななど、強くしつけられていた。自然制約の多い悪条件のうえにこのような封建的な難かしいしきたりの中の生活であつたのでそれらにまつわる諺が伝えられている。

しかし文化が進み生活が合理化されるに伴つてそれらの諺を口にする人は少なくなり、漸次われわれの身辺から遠ざかつていくがおそらく次の世代には消滅するのではないだろうか。

漁業は水ものといわれる。何とかして魚運にありつこうということから他の産業に比べて縁起をかつぐことが強く、諺に始まつて諺に終るといふほどで因習にとられることが多い。漁村の諺などは時代逆行の感がするけれども県内の諺、俗信の中から漁業にまつわるものを抽出して次号から紹介したいが何かの参考になれば幸いである。

解説はあくまでも古老のいう説を生かし、私見は補足の程度に加えた。なおこの

稿は他に発表を予定している「さつま俚諺」の中から抜粋したので、中にはすでに本誌並びに拙著さつま漁村風土記に書いたのと重複するのが2,3あることをおことわりする。

(鹿児島県漁業公社専務取締役)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆ 奄 美 短 信 ☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

※ 1月にして金魚が卵を産む———という、例え水産人でなくても一度金魚を飼つた試しのある人なら誰でもちよつと頭を傾けたくなる。例年ならば、奄美大島でも早くても3月末になつて始めて産卵するのが常であるが、今年は早くも1月に産卵をみた。

さては早くも春の到来かと暫し様子をうかがう。ところがその後2月も過ぎて3月中ばになると、気象は再び冬へ逆もどりの途をたどり、或る日は最低気温7℃台まで低下して島民を震い上らせた。全国的に気温は低めとはいふものの、最低気温7℃台という奄美大島では真冬の気温にも等しく、その真冬でさえも滅多に使わない火鉢が又恋しくなろうというものである。

去る4月14日までの10日間、試験船「かもめ」が本場から回航し、大島本島の沿岸漁業に基づく海況・水質調査など、かねてから待望の、殊に外海についての貴重な資料を得ることができたが、その際の湾内観測でも0~10mまですべて19℃台の水温を示し、例年の同時期の22.3℃に比してかなり低く、水ぬるむ時を待ちわびている海中の生物様々には同情の気持も湧く。

この寒気漂う最中に人さわがせなマスコミなど、4月末には「早くも海に遊ぶ子ら」とかなんとか常夏の島の宣伝は大ゲサである。まだ長袖に身を包んだ島の当人たちにとってはいささかこそばゆい心地ではあつた。

※ ゴールデン・ウィークの第1日目、当分場は職員家族一同で恒例の花見を催した。場所は知る人ぞ知るホノホシ海岸。不運にも当日はいまにも降り出しそのような天気ではあつたが、山ゆりの咲き乱れるかん木の中を歩む時のハブへの恐怖心、眼前に展開する太平洋のうねりと岩礁など、大島ならではのスリルと恵まれた自然美とを満喫さしてくれた。或る人は盆栽の樹木を物色し、ある人は愛用のカメラに家族をおさめるなど、実に和やかな半日であつた。

11には監査も滞りなく終り、職員一同気を新たにしたところである。

(H、S生)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
 ☆ 養 魚 場 の 動 き ☆
 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

1、概 況

39年度購入卵（にじます）及び当該採卵分のふ化管理も終り、すでに餌付け稚魚として飼育中、今年は昨年同期にみられた稚魚の疾病も現在までのところ徴候なく各群とも順調な成育を示している。

例年4月上旬には稚アユの飼育を始めるが、低水温のため河川産稚アユの採捕が遅れ当該では4月20日から飼育を始めた。

また、コイの産卵に備えてミジンコ生産も行なつたが今年は産卵がやゝ遅れて6月上～中旬が盛期になる見込みである。

2、4月飼育現況表

魚 種	4月1日飼育数	死魚数	販売魚数	4月給餌量	増重量	4月30日飼育数
稚 マ ス (0年魚)	190 kg (800,000)尾			443.4 kg	772.8 kg	962.8 kg (784,300)尾
食 用 マ ス (1~2年魚)	998.4 kg	2.7 kg 26 尾	食用として2,539 kg 種苗として3,700 尾	371.5 kg	225 kg	773 kg
親 マ ス 候補 (1~2年魚)	378.2 kg 2,474 尾	7.7 kg 18 尾		222.8 kg		410 kg 2,456 尾
親 マ ス	332 kg 474 尾	0				350 kg 474 尾
ア ヲ	4月20日より 15.5 kg (37,450)尾	36.4 kg 8,940 尾		114.6 kg	114 kg	270 kg (28,510)尾
親 コ イ	200 尾	0		26 kg		200 尾
稚 コ イ	4,500 尾	0	4,500 尾	0		0

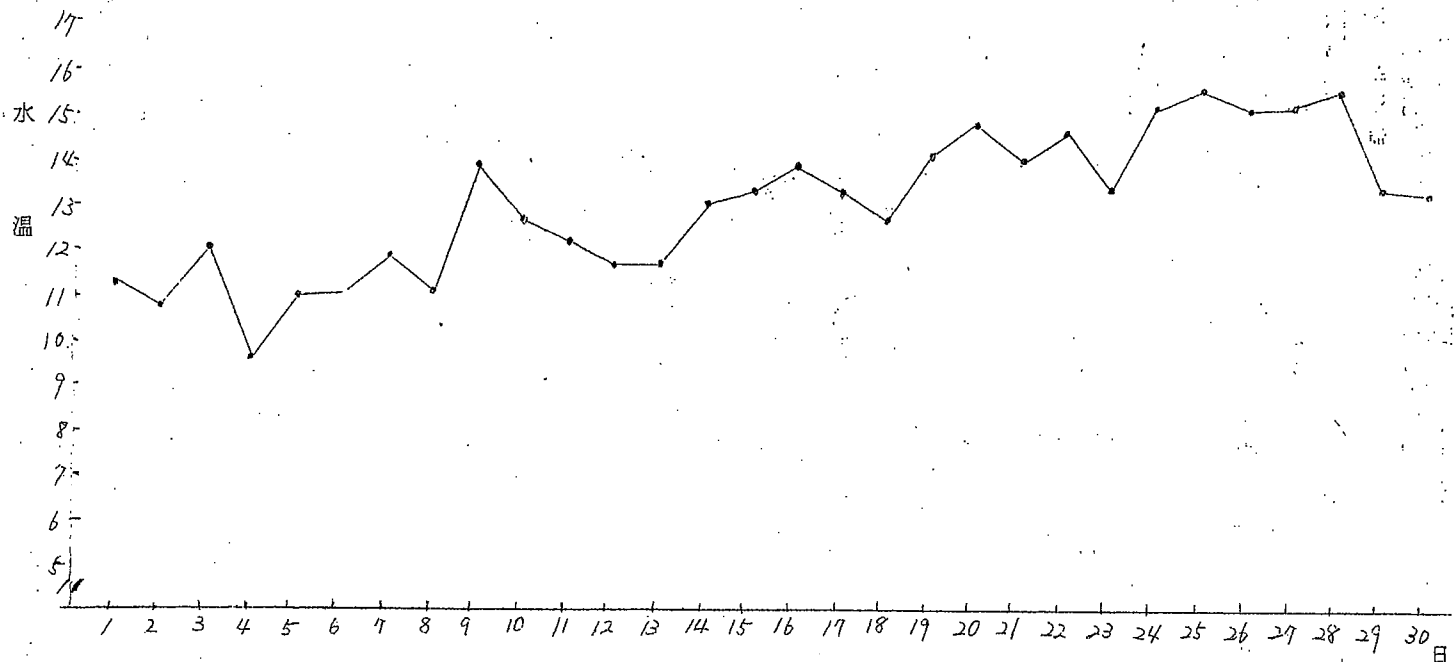
註 () の尾数は重量法により算出した。

3、給餌の概況

各魚種の給餌は水温及び魚体に適合するよう細心の注意を払っている。特にマスは水温の急昇期になつているため餌料の品質及び量については高水温期の疾病要因となり易いため質の点では配合餌料に依存した。また昨年の子魚の疾病を考え、適期に薬剤（n+180カルバミジン）の給与を行なつた。水温上昇（13℃）にともなつて親ゴイも産卵前の給餌期になり小麦を煮たものにビタミンE剤、n+180を添加して与えているが、卵質との関係から適正たんぱく及び総合ビタミンの給与等検討すべき問題である

4月の水温変化 用水路

自記水温計による1日の平均値



ろり。

アユの餌料配合割合については現在のところ決定的なものはないが、当场では概ね次の配合比で良い成長を示している。

魚粉 (北洋産)	30 ~ 40 %
市販配合餌料	20 ~ 30 %
小麦粉	10 ~ 20 %
鮮魚	30 ~ 40 %

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆ 各 部 の 動 き ☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

○ 養 殖 部

※ ノリ関係

各品種の糸状体の培養を継続中。

5月28, 29日の九州・山口各県水試ノリ部会に出席。

※ 餌料生物培養試験

5月10～13日 鹿兒島湾内の垂水、赤水、牛根、指宿の4点で採水した海水によつて Skeletonema : Nannochloris : Chlamydomonas : Micro algae : Dunaliella : Monochrysis 等の培養実験中。

○ 製 造 部

※ 薬品添加による鮮度保持試験

AF₂は濃度に比例し効果が増大、ニトロフラン20ppmとAF₂10ppmは同程度の効果を示した。

※ 共同研究指定工場主懇談会

指定工場主相互の親睦を図り、加工技術並びに情報交換を緊密にする為昭和40年第1回総会を阿久根市で開催 参加者29名

※ カツオ節カビ付試験(継続)

※ カツオ節加工対策懇談会出席

枕崎市漁協主催において新規製品をテーマとする懇談会を開催し、今後大学、水試、水産課、漁協関係者による研究協議会結成の要望がなされた。

※ 阿久根市塩干組合薬品使用講習会実施

○ 漁 業 部

※ 漁海況及び定線魚群調査

4月下旬～5月上旬にかけて薩南海域はようやく平年並みになった。なお沿岸域の下層には未だ冷たい水系が残っており、屋久島以北の海域では水深100m層で15～18℃、以南では22～23℃となっている。

5月の魚群調査は各海域とも少なく、特に沖合では全く記録されなかつた。比較的反応のあつた海域は、野間岬、宇治群島、こしき周辺、大隅東部であつた。巾着船の漁場は馬毛島の北部とこしき島東部で、種子島東部は5月上旬で終漁した。

※ ブリ仔調査

5月中旬になつて各地でみられるようになり、特に鹿兒島湾内が多かつた。当初、例年より少ない昨年について不漁になるのではないかと懸念されていたが、一応計画尾数を上廻つた。

○ 調 査 部

※ 人工飼料試験

試験船「かもめ」が採捕したブリ仔を桜島水族館外池で人工飼料による餌料試験を5月20日から開始。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆ 分 場 の 動 き ☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

○ 庶 務 係

※ 5月11日 県会計監査執行（中野監査委員、有馬監査委員事務局長、三木係長、梶原主事来場）

○ 製 造 係

※ 4月中旬～下旬 モズク加工指導——奄美水産加工所において実施、例年に比して伸びが悪い（水温の関係か）

※ 4月中旬 加工場手火山改造工事完了（4基中3基）これで梅雨期のばい乾作業簡易となる。

※ 5月中旬 下旬より操業予定のかつお節製造に備えて備品整備。

○ 漁・業 係

※ カツオ一本釣漁業

本年は喜界島附近が漁場となり漁況もあまり活潑でなく日々による漁獲変動がはげしい。餌料としてのキビナゴは豊漁でありサバ仔も来游量が多い。

○ 養 殖 係

※ 4月28日 稚貝測定 昨年人工採捕の稚貝は大きいものは殻長5cm程度に成長している。

- マベ室内採苗用の餌料生物培養。
- 真珠漁場飼測のプランクトン査定。